

第6回エネルギー環境研究会・第78回北海道石炭研究会講演会報告

本年10月20日(金)に(独)産業技術総合研究所北海道センターで標記講演会が開催された。参加者は、36名であった。副題を「エネルギー研究の新たな展望」として、次の5名の講師にご講演を頂いた。講師は、講演順に北海道大学名誉教授真田雄三先生(元本学会長)、三菱日聯咨・(上海)有限公司青野雅和氏、NEDO 環境技術開発部長和坂貞雄氏、産総研エネルギー技術研究部門齋藤郁夫氏、北海道大学教授林潤一郎先生である。講演では、20世紀初頭からの石炭研究および石炭利用技術開発の歴史を振り返り、基盤となる学術体系・技術体系の一層の進歩発展と総合化が重要であるとのこと指摘を頂き、21世紀のエネルギー問題で無視できない中国のエネルギー事情の現状と展望を再生可能エネルギー、省エネルギーの観点からたくさんのデータと共にご紹介頂いた。また、このような情勢の中、京都議定書の目標達成のためにNEDOはどのような取組みをし、産総研は炭素系資源の研究開発をどのように攻めていこうとしているのかご紹介頂いた。一方で、これからも北海道から石炭研究の情報発信をしていきたいとお考えから、新しい研究会の発足準備についてもご紹介頂き、今後の本研究会講演会のあり方について議論された。

ここで、本講演会の経緯をご紹介したい。この講演会は、二つの研究会の共同主催で例年2回(夏・冬)開催してきたが、昨年度は諸事情により開催することができなかった。本講演会は、もともと第一次オイルショックを契機に始まったサンシャイン計画の下、1975年から旧工業技術院北海道工業開発試験所の一研究室で始めた北海道石炭研究会が母体となっている。約30年の歴史がある。これは非学会活動であったが、交流を大切にしたサロンの要素が強く、開催時期を夏の北海道、冬の札幌雪祭りに合わせたせいか、毎回全国から100名を超える参加者が集まり、組織を超えた情報交換ができ、親睦を深めることができた。研究会としては異色の活動ではなかったかと思う。諸先輩の努力の賜物である。しかし、地球環境問題が顕在化し、石炭研究に逆風が吹き始めたころから、石炭研究者の減少とともに転換期を迎えた。直に当研究会の運営が一研究所のみでは難しくなり、対策として2002年8月の第73回北海道石炭研究会より、エネルギー学会北海道支部と共に共同主催とするエネルギー環境研究会が始まった。この頃より、講演内容も石炭研究に偏ることなく天然ガス、水素エネルギーや分散システムなど幅広い分野の講演者を依頼し開催するようになった。参加者の顔ぶれにも新しい方々が増えた。その後も新たな分野の支部役員の補充が十分に行えなかったことにも起因して、本会関係の研究者の減少は進み、結局、昨年度の開催ができない状況になってしまった。

本研究会の歴史は長く、参加者も馴染みの方々が多かった。力強いご支援を頂いて今回の開催にこぎつけることができた。しかし、本会運営の状況は変わらず、やむなく今回をもって北海道石炭研究会にひと区切りをつけることとした。講演会の最後には、研究会の継続と新しい活動について賛否両論のたくさんの意見が出た。その後の交流会でも話題になった。さらに、その後の宿泊者18名による札幌近郊の定山溪温泉での懇親会でも、もはや各自の出来上がり具合は定かではなかったが、研究会に対する熱い思いだけは良く伝わってきた。このような状況ではあるが、北海道支部は、来年度の第7回エネルギー環境研究会に向け準備をしなければならない。連名の名称から北海道石炭研究会が無くなってもこれからの参加者に会を盛上げて頂けると信じたい。会の名称はどうあれ、新しい活動も含め、参加したい研究会として育てていかなければならない。成否は参加者一人一人の思いにかかっているのではないかと思う。

(文責 産総研 永石博志)